

映画『ウオンカとチョココレート工場のはじまり』鑑賞

外国語学部 英語英文学科 鈴木宏枝
外国語学部 英語英文学科4年 小崎東古・滝澤悠里・吉田隼介

二〇二三年十二月二十一日に、外国語学部英語英文学科の鈴木宏枝ゼミナールの四年生は、桜木町にある横浜ブルク13で『ウオンカとチョココレート工場のはじまり』(Wonka)を鑑賞しました。以下は参加者の感想です。

映画『ウオンカとチョココレート工場のはじまり』は母と息子の優しく温かな愛の物語だった。ダール作品の代表と言える原作『チョココレート工場の秘密』での工場長ウィリー・ウオンカを主人公とした作品だが、内容は親子愛の方が強調されている。主人公のウオンカは、世界一のチョココレート店を作るために一人で試行錯誤するが、向かった街では様々な試練が待ち受ける。優しく純粋なウオンカは人の悪意に気づかず、騙されてしまったり、ウオンカのチョココレートが美味しすぎるあまりに権力に潰されそうになったりする。しかしウオンカは夢を捨てたり諦めたりすることはなかった。それはいつも彼の心の中には、亡き母との優しい思い出があったからだろう。母親からのまっすぐな愛情を受けて育ったウオンカは、困難の中出会った捨て子の少女ヌードルにも優しく接

する。まるで希望が持てなかった少女もウオンカと関わるうちにどんどん明るく笑顔が増えていき、その様子に、とても幸せな気持ちになる。また捨て子の少女が自分の心を開ける相手を見つけ、最終的に実母と再会するという展開もダールらしさを感じられる。子どもに寄り添ったダールの作風が、今作でも現れていたように思えた。ウオンカの人に対する愛情は、まさに母親譲りなのだろう。「みんなを幸せにしたい」という彼の気持ちと行動が、周りを巻き込んで幸せの連鎖を作り出していくハッピーな作品だった。

(小崎東古)

『ウオンカとチョココレート工場のはじまり』は『チョココレート工場の秘密』の続編として作られ、二つの映画には大きな共通点があると感じた。

『チョココレート工場の秘密』の主人公チャーリーは最後の金券を見事当て、チョココレート工場の見学の権利を手に入れる。それもたまたまではなく、貧しい生活の中でも何度も購入し続けたのだ。その結果、チャーリーは金券を手に入れることができた。ほかの参加者はチョコをやすやすと購入

することができた裕福な家庭や一般家庭ばかりであったが、チャーリーはその真逆の存在であった。しかし、チャーリーは最後まであきらめなかった結果、当選することができた。ウオンカも何度もくじけ、邪魔をされながらも最終的には工場を建てることのできた。チャーリーとウオンカはそれぞれ「夢」を持ちあきらめなかったことで達成することができたのだと思う。

ダールの他の作品の要素を大きく取り入れ、「夢はあきらめなければ叶う」という壮大なテーマを持つ作品である。オリジナルであるが、まるでダールが本当に描いたかのように感じることができた。

(滝澤悠里)

『ウオンカとチョココレート工場のはじまり』の中で、ウオンカが自身の夢を叶えようと行動し、その実力が伴っている一方で、そうさせてくれない環境があったり、それを阻止しようとしてくる人たちがいたりして、次から次へと多くの壁が立ちちはだかり、なかなか夢を叶えることができないというのが印象的でした。人が何か成し遂げよう

とする時には、それを邪魔しようとする理不尽な力があることは現実の世界でも同じだと思えます。そんな理不尽で困難な場面でも諦めずに努力し続けることで夢は叶い、その向こう側には見たことのない景色が広がり、今まで気がつかなかった大切なことに気づくことができ、かけがえのない仲間を得ることができるといふことをこの映画が教えてくれた気がしました。その時はウォンカにとつて理不尽で困難だった出来事も、結果的にはそれらがあったからこそ気づくことができ、得ることができたものも多くあり、必要なさそうに思えることであっても無駄なことなんてないと感じました。私も理不尽で困難な場面に遭遇しても、ウォンカのように負けることなく自分の夢を追い続けていこうと思いました。

（吉田 隼介）



入場前にポスターと記念撮影